

**肌にやさしい化粧品を  
使っているのに、  
なぜ、キレイにならないのか？**

**基礎化粧品について  
私の所見**

**ルイボスゲルクリーム  
ルイボススキンローション  
ルイボス クレンジングジェル**

**「想い」が世界を変える**

**株式会社 エモーション  
社長 香川 湧慈**



---

---

いつも、ありがとうございます。株式会社エモーション社長の香川湧慈と申します。私の化粧品についての所見ですが、ご一読頂いて何かの参考になれば甲斐があります。

## 肌にやさしい化粧品を使っているのに 何故、キレイにならないのか？

### 私の所見——

#### 1. 無添加化粧品は安全か？

---

「無添加化粧品なら安全」とか「天然成分なら安心」という表現が数多見られますが、疑問を感じるのです。当たり前のことですが、化粧品には安全性が求められます。肌が荒れやすかったり、敏感な場合には尚更ですね。

特に近年、食べ物や環境の変化によって敏感肌の方が急増しています。そのせいか、化粧品には「無添加」という言葉が多用されるようになりました。どうも一般的に「無添加＝安全」と考えられているようですが、そもそも「無添加化粧品」ってどういう意味なのか？

「無添加」とは読んで字の通り、添加されていない、つまり「配合されていない」ということです。

だから「香料無添加」とか「着色料無添加」って、書いてあれば意味も分かりますが「無添加化粧品」としか書かれていない広告物の多いこと。

---

「無添加化粧品」とだけ書かれると、何も配合されていない化粧品ということになってしまいます。

「この化粧品には、何も配合されていませんよ。」と宣伝しているようなものです。

でも「無添加」の意味を知らない人は、安全な化粧品だと思い込んでしまうんですね。本来「無添加化粧品」と言えば「指定表示成分」を配合していないものでした。

「指定表示成分」というのは、1970年代に「アレルギーを引き起こす可能性がある成分」として当時厚生省が指定した成分のことです。

これらの成分を配合する場合には、必ずその旨を容器に表示することが義務付けられていました。と同時に、消費者や化粧品業界の間で「表示指定成分」は肌にやさしくない。という考え方が広がりました。その結果「表示指定成分」を配合していない化粧品＝「表示指定成分無添加化粧品」が生まれたのでした。

そして「無添加化粧品」のメーカーは二つに分かれました。一つは「表示指定成分無添加化粧品」とちゃんと表示しているメーカー。

もう一つは「無添加化粧品」としか表示していないメーカーです。

「無添加化粧品」だけでは、何が無添加なのか、さっぱり分かりません。

---

---

でも「無添加」の言葉だけで、安全そうなイメージを持つことが出来ますね。それで売れた化粧品が沢山ありました。

ところが2001年に「表示指定成分」の制度そのものが無くなりました。代わりにそれまでの「表示指定成分」だけではなく、化粧品に配合された全ての成分を、容器か外箱に表示することが化粧品メーカーに対して義務付けられました。こうすることで、どんな成分が配合されているのか、されていないのか、誰の目にも明らかになりました。

化粧品を使う側にとっては「自分に合わない成分が配合されているなら使わない」と判断出来たり、肌トラブルが起こった時に、どの成分が肌に合わなかったのかを特定しやすくなります。

「無添加化粧品」を作っていた化粧品メーカーにとっては「何が無添加なのか」をごまかすことが出来なくなりました。

なのに、相変わらず「無添加化粧品」は世の中に溢れています。どうも、こういった化粧品メーカーは未だに「無添加化粧品は流行りだから売れる」と思っていて、ひどい化粧品メーカーになると、わざとお客さんに誤解させるような広告宣伝をしているメーカーもあります。

だから、化粧品選びされる際に「無添加化粧品」という言葉を前面に出して、何が無添加なのかが分かりにくい、誤解を招く表現を多用しているメーカーは、避けた方がいいと思うのです。本当に化粧品の開発に携わっていれば、こんな宣伝は恥ずかしくて出来ないはずです。

---

無添加化粧品＝安全ではありません。

「無添加」という表示が、安全性を保障する訳ではないのです。安全っぽい雰囲気だけの、まぎらわしい広告に惑わされないようにしてほしいものです。

## 2. 化学成分100%でも「オーガニック化粧品」?

---

オーガニックというのは、農業の形態を表した言葉です。農薬や化学肥料を使わず農作物を栽培しようという考え方です。これが「オーガニック化粧品」になると「化学的な成分を使用せずに作る化粧品」という意味で使われているようです。しかし、どういう化粧品が「オーガニック化粧品」なのかが、とても曖昧だということなのです。

「オーガニック化粧品」の定義は、各化粧品メーカーに任されているからです。

化粧品には薬事法で決められた「化粧品基準」というルールがあり、安全に使用出来るよう配合する成分が規定されていますが、法的には「オーガニック化粧品」と認定されるものはないのです。つまり、どんな化粧品でも、化粧品メーカーが「これはオーガニック化粧品です。」と言えば、それだけで「オーガニック化粧品」にすることが出来るのです。

極端に言えば、ただの水を「オーガニック化粧品」だと言うことも出来ますし、化学合成された成分100%の化粧品でも「オーガニック化粧品」として売ることが出来るのです。

だから、オーガニック化粧品と言うだけでは「安全」とも「肌にやさしい」とも言えないのです。化学合成というのは、

---

自然界には存在しない成分や、自然界の成分と同じ性質を持つ成分を、人工的に作ることを言います。

「自然」「天然」という言葉が、身体や環境に良いイメージを持っているのに対して「化学」や「合成」は身体に悪いもの、肌に負担を与えるものと考えられやすいですが、そんなことはありません。

合成成分の中にも安全性の高いものは沢山あります。また天然の素材から作った成分が安全だということも誤解です。合成成分の「安全性」という意味には、肌に負担を与えにくいのはもちろん、成分の品質が安定している為、常に同じ効果を発揮するという事も含まれます。

注意したいのは「天然成分＝安全」というイメージに便乗して実際に配合している成分内容とは異なる宣伝を行っている化粧品メーカーが沢山あるということです。

だから、実際に配合されている成分について、きちんと説明している化粧品を選ぶことは大切です。

「天然成分100%」という聞こえは良いですが、化粧品成分に関して言うと、天然成分ほど、安全性が不安定なものはありません。　　どういうことかと言うと、例えば「天然成分のローズエキスを使っています」という化粧品があったとします。

収穫したローズから抽出したエキスを、そのまま化粧品にすると、、、、どうなるか？

まず、時期や産地などによって、エキスの品質はバラバラです。

---

更に、抽出したエキスには様々な不純物が含まれています。

このような原料から化粧品を作ると、化粧品そのものの品質にバラつきが生まれます。また、不純物の中には、それ自体が肌に刺激を与えるものもあります。これが、肌トラブルの原因になることがあります。天然だからこそ、肌トラブルを招くことがあるのです。

だから「天然成分100%」や「オーガニック化粧品」や「無添加化粧品」だから、、、  
「だから、安全だ。」というのは間違いです。

### 3. 防腐剤は化粧品原料自体に含まれているもの

---

法的に「防腐剤を配合しなければならない」という決まりはありません。だから、腐るのを覚悟で防腐剤を無添加にしても、問題はありますが、でも万が一腐ってしまったら？

その腐った化粧品をお客さんが使ってしまったら、どんな肌トラブルになってしまうか分かりません。

そもそも、化粧品をつくる為に使用する原料そのものに、防腐剤は既に配合されています。

だから、化粧品を作ろうと思えば「防腐剤を一切使わない」というのは不可能に近いのです。

「防腐剤無添加」の化粧品メーカーが、原料に含まれる防腐剤のことを、どのように考えているのか、不思議です。

ですから99.9%の確率で、防腐剤を全く配合しない化粧品を作るのは無理だと思うのです。

---

仮に作ったとしても、そんないつ腐るか分からない危険なものを販売は出来ません。

だから、肌にやさしい化粧品を選ぶなら、防腐剤がキチンと配合された化粧品をお勧めします。

化学合成されていない植物エキス自体が防腐効果のあるものもありますから、それを使用することで「化学合成防腐剤無添加」の化粧品はちゃんと存在します。

または、製造段階で真空パックにして、一回使い切りの化粧品ですと、防腐剤無添加化粧品は作れます。

一般的に肌にやさしい刺激性の少ない化学合成防腐剤が「メチルパラベン」です。

パラベンには、抗菌性の強い（刺激性の強い）順に、ベンジルパラベン・プロピルパラベン・エチルパラベン・メチルパラベンとあります。

メチルパラベンは、皮膚への刺激性が少ないという観点から、自然派化粧品といえども、品質保証の為の防腐剤は必要である為、使用される場合が多いのです。

メチルパラベンは、化粧品を微生物から守り、最後まで安全に化粧品を使用出来るようにするために多くの化粧品に用いられています。幅広い微生物に対する静菌作用に優れています。

また、食品や飲料、医薬品に使用されています。

ところが、パラベンは前述の「表示指定成分」に過去含まれていた為、イメージが良くありませんでした。

「表示指定成分＝悪」というイメージが浸透していたからです。

元々、指定成分は約50年前に当時の厚生省が「アレルギー反応を起こす可能性があるものを配合する場合は、容器や外箱に表示しなくてはならない。」と決めたものでした。

---

でも、考えてみて下さい。50年も前に決めたことです。現在では技術も進歩し、その結果安全性が高まった原料も沢山あります。また「表示指定成分」に認定されていない原料であっても、アレルギー反応を起こす原料は数多く存在したのです。つまり「表示指定成分」が規定されたことで「指定成分が悪くて、その他は安全」という誤解が生まれたのです。そのいい例が「パラベン」でした。パラベンは低刺激な上、優れた防腐効果があり、食品にも使われ安全性が高いのに「防腐剤（パラベン）無配合」が、あたかも安全である。と宣伝しているところは、どうかなあと思うのです。

## 4. アルコール使用について

---

化粧品のアルコールの役割は、

1. 美容成分の抽出や安定化。
2. 保存料。
3. 清涼感を出す。
4. 蒸発時に余分な水分が飛んで、後肌を快適にする。
5. 皮膚温度を下げ、毛穴を引き締める。

生産過程で使用されていなくても、原料の保存に使用されていることが多いのです。

標準的な化粧品に含まれるアルコールの含有量としては、水78%に対し2%前後。

美容成分の抽出にもエタノール（通常使用されるアルコール）を使用しない、本当のアルコールフリーの化粧品は「化粧水が肌に付いたか付いていないか分からない」ような使用感になる

---

ものが多いです。

だからアルコールフリーでも、保湿剤でとろみ感を出し、しっとりした肌感を出すようにしているアルコールフリー化粧水もあります。

アルコールやパラベンなど、名称にこだわらずに、お肌に合うものを使用されるのが良いと思うのです。

また、本当のアルコールアレルギーの人は、何万人に一人くらいの割合だと言われているようです。

「自称敏感肌」という悲しい思い込みで、キレイになれるチャンスを逃してはいけないと思うのです。

## 5. 「肌にやさしい」より大切なこと

---

化粧品を使う全員と言っていいほど多くの人が、キレイな肌を目指してこれまでに様々な化粧品を試して来られたことでしょう。

「刺激が少ない」という化粧水や「敏感肌用」の洗顔料など。スキンケアについて沢山悩み、雑誌やインターネットに溢れ返る情報の中から、自分の肌に合う化粧品を今も探しているのではないのでしょうか？ そういう人達に是非、もう一度目を向けて頂きたいことがあります。

それは「あなたが、どうして肌にやさしい化粧品を探しているのか？」ということです。

どんな化粧品を使っても肌が荒れる。洗顔料で顔を洗う度に赤くなる。肌が突っ張って、かゆくなる。

そんな肌の悩みを解決して、健やかでキレイな肌になりたい。でも、どんな化粧品でも使える訳ではないから「肌にやさしい化粧品」を探し続けているのではないですか？

---

それなら、あなたの化粧品選びの基準に、次のことを追加して欲しいのです。それは「しっかりと保湿をすること」です。

肌には、身体の外からの刺激から身を守る為の「バリア機能」が備わっています。この「バリア機能」は、肌の水分と密接に関わっています。たっぷりの水分で潤った肌は、キメが細かく、外部からの刺激を受けても跳ね返してしまいます。

しかし、肌が乾燥していると、キメが乱れてバリア機能が弱まり、外部からの刺激に敏感に反応してしまいます。

これが「敏感肌」の一番の原因です。つまり刺激に強く、健やかでキレイな肌を作る為には、しっかりと肌を潤し、バリア機能を高める必要があるのです。

どんなに刺激の少ない、肌にやさしい化粧品を使っても、肌トラブルの原因である肌の乾燥を改善していなければ、また同じ肌トラブルを繰り返してしまうのです。

だから、本当にキレイな肌になりたいなら、肌に刺激が少ないのはもちろん、しっかりと水分補給が出来る保湿力の高い化粧品を選ぶというのも効果的です。

また、多くの人々が「しわ」や「しみ」が出来るとエステに行ったり、高級化粧品を使ったりしますが、確かに効果はあるでしょうが、その前に、原因である乾燥肌をスキンケアで改善して、肌を健康な状態に戻してからエステに行くのがより効果的です。

そうしないと、せっかく一時的に改善しても、また同じトラブルが発生します。

つまり、「水分と良質で適度な油分」を補給する事によって肌の回復機能を復活させて健康な状態に戻すのが先決なのです。

---

よく「風邪は万病の元」と言われますが、乾燥も同じように「乾燥は肌トラブルの元」です。

ただ、水分を与えるだけだと、過乾燥を起こして以前より悪化することがありますから、水分を維持するために「良質で適度な油分」が必要なのです。

また、特定の成分が保湿に良いからと言って、内容を多く配合すると、使用感は最初は感じ良く「ああ、これいい！！」っていう感覚を覚えますが、実はこれが必ずしも肌に良いとは限らないのです。

知らず知らずの間に、肌に徐々に負担を掛けている場合が多いのです。

世の中の化粧品が多くが、保湿が強過ぎたり、香りが強過ぎたり、売る為の「何か」が強過ぎ、それを知らないうちに普通になり、肌に負担を掛けていることであるのです。多くの人が「気づいていない」のです。

「肌にやさしい」というのは、最初の使用感はそんなに「インパクト」は無いものなのです。大事で大切な事は「成分同士のバランス」だと私どもは考えています。

ミネラルに「命の鎖」というのがあるように、化粧品を作る上での成分同士の相性が大切だと思うのです。

いい成分だから、沢山配合すれば良いという単純なものではありません。

---

それには化粧品を実際に工場で作る製造メーカーもそうですが、そこに製造委託する企画開発メーカーの、企業姿勢が一番問われるのです。

人生に対するものの考え方、理念、理念に則った方針、会社の対応、社員の人間的資質、これらを総合して商品というものは選ぶべきだと思ふのです。

製造メーカーの姿勢と技術力。企画開発メーカーの姿勢と人間性。こういう観点で化粧品や、その他「商品」を選んで行く消費者が増えて行くことを願っています。

ちなみに、

私どもの「ルイボスゲルクリーム」(顔・全身用保湿ジェル状美容液)  
「ルイボス・スキンローション」(化粧水)「ルイボス・クレンジングジェル」(洗顔料兼クレンジング)は、成分同士の「バランス」を重視して作っている「肌にやさしい」化粧品を目指しています。

感謝。